

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 15 日現在

機関番号：34312

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21530709

研究課題名（和文）大学生の学業遂行に至る学年別因果モデルの構築—大学生生活要因・授業要因からの検討—

研究課題名（英文）Causal Modeling Predicting Academic Performance of University Students Based on the Factors about Students' University Life and their Classes

研究代表者

松島 るみ（MATSUSHIMA RUMI）

京都ノートルダム女子大学・心理学部・准教授

研究者番号：40351291

研究成果の概要（和文）：本研究では、大学生の学習意欲や学業満足感等、学業遂行に影響を及ぼす要因について、授業要因と大学生生活要因の両要因を想定した。本研究の結果、大学生の学習意欲や学業満足感に影響を及ぼすのは、講義内容の充実感等、必ずしも学業や授業に関する要因だけではなく、授業における他者との意見交換や交友関係の良好さ、アイデンティティの獲得に関しても、大学生の学習意欲や授業意欲を左右する要因となることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：The main purpose of this study was to examine the factors which influence university students' academic performance and motivation. The major finding was as follows. Not only the factors relating to classes, such as the ways of teaching and interest in classes, but also successful adaptation to university life and identity led to an increase in the students' motivation.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：大学生・学習意欲

1. 研究開始当初の背景

(1) 問題

近年、大学進学率の上昇に伴い、大学生の学力や学習意欲低下が問題とされている一方で、大学生活における学業が占める比率が増えていると報告する研究は多い。教育重視の大学教育改革や就職難に対する学生の「勉強志向」の傾向が強まっていること、また大

学生の「生徒化」など、必ずしもその背景は肯定的なものばかりではないが、いずれにしても、大学生にとって、学業や大学における授業の位置づけは、以前に比べると変化してきているものと考えられる。そして、大学における学業や授業は、大学適応感や大学満足度、自己評価にも直接的、間接的に影響を及ぼしていることが多くの研究で示唆されて

おり、大学生にとっての学業や授業は、我々が想像する以上に重要な活動であるといえる。

この様に、大学生の学業問題を重視した研究は多く行われてきたものの、大学生が入学後、どの様に大学の授業に適応し、学習意欲を維持するのか、大学生の学習過程の変遷を縦断的に追ったものは多くない。

(2) 2004年～2008年までの大学教育に関する縦断的調査結果より

筆者らは、2004年から2008年の5年間、縦断的な調査を実施することにより、様々な観点から大学生の学習意欲に関連する諸要因の検討を行ってきた。この結果、大学生の学習意欲に影響する要因は必ずしも授業内容や授業方法等、「授業評価」で測定される様な授業要因だけではなく、授業以外の要因、つまり大学生が授業にどのような態度で臨み、参加したのか、そしてそれ以前に大学生が授業をどのように捉えているのか等、大学生側の要因によっても影響がみられることが示唆された。

さらに、学習意欲に影響する要因は、学年によって差異がみられることが明らかになり、入学時は大学進学動機や、高校から大学への環境移行に伴う大学や大学の授業に対する適応の程度により学習意欲に差異がみられることが示された。また学年進行とともに、大学への適応感は上昇する一方で、そのことがプラスにもマイナスにも転じることが明らかになった。これまでの縦断的調査の結果より、学年によって学習意欲に影響する要因は異なっていることから、学業遂行へのプロセスについても、学年ごとに解明することが必要であるという問題意識に至った。

2. 研究の目的

1. で述べた研究の背景に基づき、本研究では、大学生の学業遂行に至るプロセスとメカニズムについて解明することを目的とした。学業遂行に至るプロセスについて、授業そのものの要因との関連は検討されてきたが、大学生生活全般に関わる要因も含めて検討している研究はほとんどみられない。このプロセスは、学年によって差異がみられることが予測される。

3. 研究の方法

(1) 変数の整理

本研究では、学業遂行に影響を及ぼす要因として、授業そのものの要因（授業要因）と授業の背景にある学生側の様々な要因（大学生活要因）の両要因を想定した。

授業要因として取り上げる変数としては、大学授業観、授業に対する自己評価等が挙げられる。大学生活要因としては、大学適応感、大学満足感、大学生活における重視活動等を中心に取り上げる。

これまでの縦断的研究の結果より、学年に

よって学業遂行に及ぼす要因は異なることが予想されるため、上記の変数に加えて、大学初年度での調査では、入学後の意識のズレを問うリアリティショック、また筆者らの先行研究では、2、3年生において、自身の適性や将来に関する意識が学習意欲に影響を及ぼしていることが示唆されていることから、アイデンティティの変数も加えていく。

従属変数となる、学業遂行の指標としては、学習意欲や大学満足感に関する尺度を使用していく。

(2) 研究方法の概要

①使用測度の整理

学業遂行・学習意欲・大学満足感に影響する要因の測度の整理と再検討を行った。

②縦断的調査の実施

21年度前期開始直後から第1回目の質問紙調査を実施し、各年度、半期ごとに約7回のデータを蓄積、データ処理を進めた。

③調査結果の分析とまとめ

調査結果の分析後、仮説モデルの検証を行い、学業支援に向けての全体的考察を行った。

4. 研究成果

(1) 学年による学習意欲上昇・下降の要因

本調査を進めていくにあたり、まず学習遂行、学習意欲に影響を及ぼす要因について整理するため、学習意欲が大学在学中にどのように推移するか、また意欲が上昇する時、下降する時の要因を合わせて尋ね、学年別にその要因をまとめた(Matsushima & Ozaki, 2010)。

表1 学年別学習意欲上昇の要因(Matsushima&Ozaki, 2010)

	Main Factors of Increasing Academic Motivation
First Grade	<ul style="list-style-type: none"> •interest in classes •successful adaptation to university
Second Grade	<ul style="list-style-type: none"> •increase in classes related to major •getting used to university life
Third Grade	<ul style="list-style-type: none"> •good and specific future prospects •focus on graduation thesis

表2 学年別学習意欲下降の要因(Matsushima&Ozaki, 2010)

	Main Factors of Decreasing Academic Motivation
First Grade	<ul style="list-style-type: none"> •difficulty of classes •laziness from being too comfortable
Second Grade	<ul style="list-style-type: none"> •loss of interest in major •confusion about their own aptitude
Third Grade	<ul style="list-style-type: none"> •confusion in what to do after graduation •busy daily life outside of studying

結果は、以下にまとめた通りである。

①授業の興味深さや大学生生活の慣れ等が、学

学習意欲上昇の理由づけとして示され、勉強以外の活動の忙しさ、何となくやる気が起こらないこと等が学習意欲下降の理由づけとして挙げられた。必ずしも授業に直接関係することが意欲低下の理由になるとは限らない。

②学年が上がるにつれて、「将来」に関する項目が意欲上昇の理由としてあげられる傾向にある。

③1年生では、授業内容理解の難しさ、勉強することの意義の不明確さ、2年生では成績の低下、専門科目への興味の低下を肯定する者が多いという結果が再確認された。

以上の様に、学習意欲変化の理由には学年に共通する点に加え、学年差がみられることも明らかにされ、在学時期に応じた学業支援のあり方を検討していくことが必要であることが示された。

以下の(2)(3)では、1年生に焦点を当てた研究成果を、また(4)では、2年生を焦点に当てた研究成果について述べる。

(2) 1年生における学習意欲の変化とその要因

本研究では、縦断的調査により、大学1年生の学習意欲の変化とそれに関連する要因を明らかにすることを目的とし、前期から後期にかけての学習意欲得点の変化をもとに群分けを行い、それらの群の違いについて、授業要因(大学授業観、リアリティショック)、大学生活要因(大学観、大学生活における重視活動)の点から検討した。

まず、学習意欲の変化に関して、全体的傾向としては、先行研究と同様、1年生の前期から後期にかけて学習意欲の低下が確認された。しかし、全ての学生において、学習意欲が低下するとは限らず、個人差がみられると考えられたため、前期と後期における意欲の高低に分類した(HH群、HL群、LH群、LL群)。この結果、前期から意欲がそれほど変わらない群が多数を占め、少数ではあるが、前期には低かった学習意欲が、後期に高まる者も見られた。意欲の変化による群の違いを以下に述べる。

①前期後期ともに学習意欲の高い群(HH群)については、大学に対して、出会いの場や勉強の場など、前期から一貫して積極的な意味づけを見出していることが明らかになった。また授業に対しても、視野の広がりや知的な好奇心、自己成長といったポジティブなイメージを前期後期とももっており、入学後のリアリティショックも、他の群と比較して低い傾向にあった。また、大学生活において重視する活動に関しては、前期後期いずれにおいても、授業が過半数を占めており、学業満足度も高かったことから、大学における学業を自分の中に意味づけ、その取り組みに満足できている群だと言える。

②前期後期ともに学習意欲の低い群(LL群)

については、大学に対して、出会い・勉強の場としての意味づけが他の群と比べて低く、授業に対しても、義務・退屈感が高く、知的な好奇心、自己成長、視野の広がりなどといったポジティブなイメージがもたれていない傾向にあった。また、入学後のリアリティショックに関しては、講義内容に対する不満が前期後期ともに特に高く、学業満足度も低い傾向にあった。さらに、大学生活で最も重視する活動に関しては、後期においてアルバイト重視が増える傾向にあった。大学での授業に対してあまり満足できておらず、大学生活における学業の意味づけが見出しにくい傾向が読み取れるとともに、後期に入ると、学業や大学から離れつつある学生の存在もうかがえる。

③前期から後期にかけて意欲の低下する群(HL群)については、前期と比べて後期において、大学に対して勉強の場という認識が低下すること、授業観に関しては、視野の広がり・出会いや自己成長といったイメージにおいて、特に後期で得点が低下することが特徴的であった。学業満足度も後期に低下し、大学生活満足度も若干低下する傾向が読み取れた。大学生活において重視する活動に関しては、前期では、大学での授業が多数を占めていたのに対し、後期では、授業重視が大幅に減少し、資格の取得が増加する傾向にあった。

④前期から後期にかけて意欲の上昇する群(LH群)については、大学に対して、後期において、勉強の場という意味づけが高まること、授業観に関しては、知的な好奇心や視野の広がりといったイメージは、学習意欲が低めであった前期からもたれていたものの、前期には義務・退屈感が高かったのが、後期において低くなっていることから、全体として、前期から後期にかけて、授業観がポジティブになっている傾向が読み取れる。また、リアリティショックに関しても、前期と比べると、すべての側面において、得点が低下していることが読み取れる。これらは、大学観に関して、後期において大学を勉強の場として位置づけられるようになったこととも関連する結果であろう。大学生活で重視する活動として、後期において幅広い教養を重視するものが増えていることから、授業のみならず、広い意味での学業に意味を見出す者の存在もうかがえる。

以上の結果に示された通り、1年生の特徴として、学習意欲の変化に関わる要因としては、授業要因が中心となっていた。一方、大学観や授業観との関連では、友人や人の出会いとして大学を捉えられることや、視野を広げたり、出会いが得られる場として授業を捉えられることが、学習意欲にとって重要であることが示された。

(3) 学業に対するリアリティショックを媒介とした、大学授業観が学習意欲・大学満足感に及ぼす影響

本研究では、大学生が大学での授業をどう捉えているかという大学授業観に着目し、入学時の授業観がその後の学習意欲や大学満足感にどのような影響を及ぼすかについて、学業に対するリアリティショックを媒介変数とした因果モデルにより検討することを目的とした。これまでの先行研究では、1年生には、入学前の学業イメージと実際に経験した学業の間にズレがあり、そのことが入学後の大学適応感や違和感に影響すると考えられている。

分析の結果、授業観とリアリティショックの関係について、入学時に、授業に対して、視野の広がりや充実度、他者との意見交換を期待する者ほど、講義内容に満足しており、授業や学習課題による時間の束縛感を感じることが少ないという傾向がみられた。また、授業に対して、義務や退屈というネガティブなイメージを持つ者ほど、講義内容の満足度は低く、教員や教授法に不満を感じている傾向がみられた。

一方、授業に対して、専門的知識を身につけたり、深めることが出来るという知的好奇心が高まるイメージを持つ者は、講義や課題の忙しさにより、自分で勉強する時間がとれない等、時間的なゆとりや、時間に束縛されている感覚を持っている傾向が示された。知的好奇心の高い者は授業や学業に対する真面目な姿勢を持っていると考えられ、このことが時間的束縛感に影響を及ぼした理由の一つではないかと推測される。

次に、リアリティショックと大学満足感・学習意欲の関係については、講義内容不満足から学業満足感、大学生生活満足感、学習意欲の全ての変数に有意な負のパスが示された。授業や学業に対する否定的なイメージギャップは、学業の適応、学習意欲のみならず、大学生生活満足感とも負の関連性を示し、先行研究でも明らかにされている様に、大学における授業や学業が、大学生生活全般の満足感にも影響を及ぼすことが再確認された。教授方法不満と履修不自由感からは有意なパスが示されなかった。

最後に、授業観から大学満足感・学習意欲への直接の影響を検討したところ、視野の広がり・出会いは、学業満足感・学習意欲にそれぞれ有意な正のパスがみられ、義務・退屈感からは学習意欲に有意な負のパスがみられ、妥当な結果が示されたといえる。

以上のことから、大学授業観は入学後に感じる授業のイメージギャップに影響し、特に、視野を広げたり、意見交換をする場という大学の授業に対するイメージは、講義内容に対する満足感へ影響を示し、さらにこのことが、

大学満足感や学習意欲の高さに影響を示すことが明らかになった。また、授業に対する、義務や退屈というイメージは、教授方法や講義内容の不満に影響し、このことが、大学満足感・学習意欲の低さに影響していると推測される。

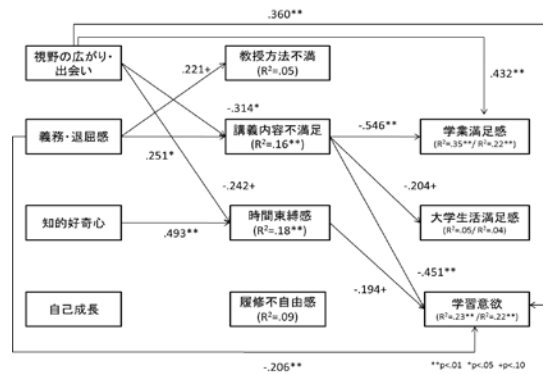


図1 授業観がリアリティショックを媒介変数として、学習意欲・学業満足感・大学満足感に及ぼす影響(松島・尾崎, 2012)

(4) アイデンティティと大学授業観・学習意欲の関連

大学生におけるアイデンティティと意欲低下傾向・動機づけとの関連については、複数の先行研究で検討されてきた。アイデンティティと大学生生活に関する意欲との間にはある程度一貫した関連がみられることが先行研究により明らかにされているものの、アイデンティティと授業に対する意欲との関連については必ずしも一貫した結果は得られていない。しかし、大学生生活における一義的な活動である学業は、大学生生活と切り離して考えることは出来ず、アイデンティティのあり方により、学業や授業への態度や意味づけに影響したり、また、逆に学業や授業への取り組みや意味づけにより、アイデンティティの形成に影響を及ぼすという相互関係がみられるものと推測される。そこで、本研究では、大学生を対象に、アイデンティティと大学授業観、学習意欲、授業評価に関する自己評価の関連について検討することを目的とした。

この結果、アイデンティティと授業観については、ほとんどの下位尺度間で有意な関連がみられたが、特にアイデンティティと義務・退屈感の関連が相対的に高かったことから、アイデンティティが獲得出来ない者ほど、授業に対する否定的な捉え方をしていたり、授業や学業に意味を見出せていない可能性が示唆される。

アイデンティティと学習意欲、授業に関する自己評価については、対他的同一性以外、3つの下位尺度で有意な相関がみられ、アイデンティティを獲得している者ほど、学習意欲

欲が高く、授業に関する興味・関心を増加させたり、学習内容を応用する等、授業に対する自己評価が高いことが明らかになった。とりわけ、自分自身が目指すべきもの、望んでいるものが明確に意識されている感覚である、対自的同一性との関連が強く、本研究では、学業全体の意欲、授業に関する意欲ともにアイデンティティとの関連性が示された。

(5) まとめと今後の課題

本研究の結果、大学生の学習意欲や学業満足感に影響を及ぼすのは、講義内容の充実感等、必ずしも学業に関する活動だけではなく、授業における他者との意見交換や交友関係の良好さ等、学業以外の要因もまた影響していることが明らかになった。さらに、青年期における発達課題であるアイデンティティの獲得に関しても、大学生の学習意欲や授業意欲を左右する要因となることが示唆された。

本研究では当初、量的研究に加えて、質的研究（半構造化面接）を行い、量的研究の妥当性を確認することを予定していた。しかし、面接における抽出の要件に合致する対象者がごく少数となったため、量的調査の妥当性を明らかにすることは難しいと判断した。今後の課題として、質的な側面からの検討も必要である。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計2件)

- ①松島るみ、尾崎仁美、大学授業観が学習意欲・大学満足感に及ぼす影響—リアリティショックを媒介として—、京都ノートルダム女子大学紀要、査読無、42号、2012、105-118
- ②尾崎仁美、松島るみ、大学生における学習意欲の変化とその関連要因—1年生を対象にした縦断的調査より—、プシケ—、査読無、11、2012、29-40

[学会発表] (計5件)

- ①松島るみ、尾崎仁美、大学生における大学授業観の変化について、日本教育心理学会第53回大会、2011、かでの2.7（北海道）
- ②松島るみ、尾崎仁美、大学授業観が学習意欲・大学満足感に及ぼす影響（2）日本心理学会第74回大会、2010、大阪大学
- ③尾崎仁美、松島るみ、大学授業観が学習意欲・大学満足感に及ぼす影響（1）、日本心理学会第74回大会、2010、大阪大学
- ④ Matsushima, Rumi, Ozaki, Hitomi, Factors Influencing the University Students' Motivation for Learning: A Cross-sectional and Longitudinal Analysis of First year to Third year Japanese University Students. 27th International Congress of Applied Psychology, 2010, Melbourne
- ⑤松島るみ、尾崎仁美、大学生における学習

意欲の変化を規定する要因—横断的・縦断的方法による検討—、日本教育心理学会第51回大会、2009、静岡大学
[図書] 計0件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松島 るみ (MATSUSHIMA RUMI)

京都ノートルダム女子大学・心理学部・准教授

研究者番号：40351291

(2) 研究分担者

尾崎 仁美 (OZAKI HITOMI)

京都ノートルダム女子大学・心理学部・准教授

研究者番号：10314345